



TITLE:

カツセルの價值論廢止と價格問題 の取扱 - 小さな試みのプレルード として -

AUTHOR(S):

高森, 晋

CITATION:

高森, 晋. カツセルの價值論廢止と價格問題の取扱 - 小さな試みのプレ
ルードとして -. 經濟論叢 1930, 30(4): 691-701

ISSUE DATE:

1930-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129867>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 四 第

卷 十 三 第

行 發 日 一 月 四 年 五 和 昭

論 叢

家屋税の課税標準

法學博士

神戸 正雄

貨幣數量説について

文學博士

高田 保馬

經營學と經濟學

經濟學博士

小島昌太郎

時 論

配給組織の合理化と中央市場の單複制

經濟學士

谷口 吉彦

說 苑

統計學^{に於ける}二つの傾向に就いて

經濟學士

蜷川 虎三

ボーレの恐慌理論

經濟學士

靜田 均

雜 錄

英蘭銀行の職能

經濟學士

有井 治

月賦信用の特質

經濟學士

今津 正二

カッセの價值論廢止と價格問題の取扱

經濟學士

高森 晋

相關係數の意義

經濟學士

益田 熊雄

酒税の立替

經濟學博士

沙見 三郎

近着外國經濟雜誌主要論題

カツセルの價值論廢止¹⁾ 價格問題の取扱

——小さな試みのプレルードとして——

高 森 晋

一 は し が き

カツセル經濟學における價值論の價值はゼロであり、價值論の地位は空しい。價格論の代位をなすものは、否王座を占むるものは價格論である。否、經濟理論即價格論である。彼は言ふ、「價值論は價格が決定さる、全過程——而も此過程に消費者財の價格のみならず中間財及生産の原本的要因の價格が含まる、——を必ず抱擁しなければならぬ。人々の所得はそれが生産へ貢獻する價格に依て決定されるから、經濟學上分配として知らる、全過程は價格論に包含せらる。だから價格論は社會問題の誠意ある研究に眞の枠を提供する。人々が

社會政策の見地より價值に就て語る時、彼等は眞に一物例へば勞働が有つべき、價格を意味して居る」と。²⁾

第一に彼が價值論を廢棄し首尾一貫して價格論を以て經濟理論を打立てんとする理由を述べ、第二に然らば彼は價格問題を如何に取扱ふかの論じ方にまで及んでみたい。

二 價 値 論 廢 止

「經濟學研究の初めより私は經濟學の獨立章としての古い價值論全體を廢棄し得べきもの、最初より價格論に關する經濟學を打立て得べきもの、そしてそれに依て是迄經濟學に關する汗牛充棟も營ならざるスコラスティックな不必要な討論を除き得るだらうと考へて來た」³⁾「價值論を廢止して直接に價格論の基礎の上に經濟理論を打立てることは當然に經濟學の新體系に適する貨幣理論を要求した」⁴⁾

カツセルが是迄段々に築上げて來た貨幣理論及現代貨幣革命の分析の中に含まる、彼の最近の結論は、彼

1) 行き方は異なるが、齊しく價值論の必要を否定する人に H. Dietzel, Vom Lehwert der Wertlehre und vom Grundfehler der Marx'schen Verteilungslehre, 1921. がある。尙之れの引用を三田學會雜誌第二十卷第三號「價值論の價值」と題する小泉教授の論文に見る。因みに Dietzel の上掲書に對する反駁書とも見るべきものが Marx-Engels Archiv. Bd. I. S. 360. Zwei Schriften über die Marx'sche Wert-theorie. (J. Rubin). 之れに就ては「新興科學の旗のもと

の最初の著作⁵⁾に表はれたる價值觀の必然的な歸結であつた。『右書以來の私の貨幣理論の發展は決して根據なき勝手な解釋でもなければ他の學者からの影響の結果でもない。

『利子の本質と必要』の讀者は、それが己に貨幣理論の本質的基礎を含めることを、而も此貨幣理論は已に經濟理論の全體系の An integral part として思考されたことを記憶されるであらう⁷⁾』

讀者と共に記憶を呼覺ますべく念の爲に若干の章句を引用するであらう。

「Value は多少漠然たる概念である。經濟學の著述家は頻りにもつと明確な意義を與へようと試み、value in use 及 exchange の如き幾種類かの價值が定義されて來た。然し此等の定義は一般に適確と精確との缺如に悩まされ、此語に附せらるべき意義に就ては多くの曖昧を留めてゐる。爲に、價值の本質と價值を支配する諸原因とに關する不生産的な討論と物議とに多くの勞力が費されて來た。之れはさうならざるを得なかつ

た。價值が價格以外の何物かを意味する場合には何時でも、心理的諸過程、諸感情或は意志の烈度に關する。然し此等の諸力は成程極めて現實的ではあるが客觀的に測定すること不可能であり、そして、かるがゆゑに價值の觀念は、量を取扱ふ一科學の基礎の用をすべき一概念にとつて火急に必要とする數學的明確さを得ないだらう。價值なる語の漠然たる事が人々をして最も輕卒に經濟理論の一般的諸問題を云々せしめ、而して斯くて惹起されたる混亂のために經濟學は大いに悩まされて來たのである。此禍に對する最も根本的にして而も有力な治療法は勿論價值理論全體を廢止する事であらう。幸にして此事は全く可能である。實際、經濟學研究を始めるのに特別の價值論を以てしななければならぬ理由は更にないのである。吾々は大きな便益を以て直ちに prices と之を支配する一般的諸原因との説明を以て發足する事が出来る。何となれば價格が何を意味するやに就ては何等の曖昧もないからである。誰にも熟知されてゐる事だからである。價格は、尙又、そ

に「第一卷第二號參照。

- 2) Cassel, G., Fundamental Thoughts in Economics, 1925. 英國版 p. 70 (因みに米國版もあり。)
- 3) Cassel, The Theory of Social Economy, 1923. Preface.
- 4) ibid. and Theoretische Sozialökonomie, 1918. Vorwort.
- 5) Grundriss einer elementaren Preislehre, (Zeitschrift für die gesamte Staatwiss

れ自體經濟學の如き量的科學が必要とするが如き一つの純算的概念である。實際、貨幣は各個人にとつては慾望の重要さに従つて諸々の慾望を分類するに、否、或程度迄此の重要さを測定さへするに手助けとなる一種の尺度である。測定は甚だ不完全かもしれぬ、がやはり個人の經濟的諸活動を規制するものは夫であり、而も貨幣で見積られたる個人の様々なる慾望は事實價格決定の爲の基礎を形成する。だからして、此等個人的貨幣評價から出發する事は經濟學者達に取つて十分出来る。そこで我々は、經濟學者として、貨幣評價の背後に横はる物的心的諸過程などに手を出す必要はない。value は a hypothetical price 即ち或條件の下に纏まるだらうところの價格に外ならぬことも亦注目すべきである。例へば、在荷を below value に賣らんと聲明する商人は之に依りて市場の正常的條件の下にて得るでもあらうところの below the prices で賣らうと云ふことを仄めかさんと欲するのである。又理論經濟學者の所謂 value in use は、―それが何等かの明瞭な意義を

有する所ではそれ以下にては得られないならば個人が商品に對して提供するだらうところの最高價格を意味する。試みに經濟學上の凡ての價值概念を取上げて吟味せんか、或事情の下に於て達するだらうところの價格以外の何物をも意味しない事を否應なしに發見するだらう。けれども此等の事情は十分精確に定義さる、ことは稀であるから、此語の意義に就て甚だ多くの曖昧が行はれ勝ちなことは不思議ではない。以上述べ來れる事からして、價格の一般的理論に含まれないところの合理的價值論といふものが當然あり得ないこと、なる。そして價格の説明に限られた研究に依るよりも豫め價值を研究することに依つてより、好く説明され得るところの問題といふものは經濟學の範圍内にはあり得ない」⁸⁾

尙「價值論に對する價格論の代位は資本利子理論を研究する時最も顯著な便益を有つ」¹⁰⁾として以上のことを勿論今日も尙具體的に例證しつつ裏書して居る。

「始め數學者としての訓練を受け初等算術的正確さ

enschaft, Tübingen) 1899.

- 6) The Nature and Necessity of Interest, 1903. (which was written in the years 1901 and 1902, and was published the following year.)
- 7) Fundamentol Thoughts in Economier, p. 64
- 8) The Nature and Necessity of Interest, 1903. (Ch. II. §1. Value and Price.) pp. 68-70

を以て科學的思考をなすべく教へられてゐる」カッセルは經濟學に於ても數量概念を高調し、量的測定曖昧乃至不可能なるものを極力排除することに専らつとめる。又「元來在るが儘の素朴を好む」¹²⁾と自ら言ふ彼は、

「經濟學は、何よりも先づ經濟學自身の方法に於てエコノミカルでなくてはならぬ。そして本質的な結果に到達するに要する勞力のエコノマイジングに於て凡て他の科學の模範となるべきである」¹³⁾との見解を持つるがゆゑに、方法論上普通に貨幣概念を閉出し而も錯雜する經濟諸問題をば恰も人間社會が貨幣の使用を未だ知らざるかの如き段階を熟知してのみ經濟學の徹底的な分析が可能であるとする一般の考へを否定し去つたのだつた。そして貨幣單位導入一點張りで經濟生活の現實にいきなりブツかつ行つた譯である。ゆゑに價值論は「教科書や教室は於て最も露顯する通り容易ならぬ邪魔物であり、全理論はたへず使用、價值とか交換、價值とかいふ價值概念の曖昧から苦しみ抜いて居る」¹⁴⁾と啖呵を切る彼は「價值は常に或事情の下に支拂は

る、價格を意味する。しかるに事情は *ad libitum* に變るから價值概念も亦訓練された學者及若い學徒を面喰せる程多様に組立てられて來た。最根本的な概念に關して一般的一致に到達する事が出來ないと言ふのは科學の信用に拘はる。此理由に依り價值概念を含まない經濟理論を打立て得るならば甚だ好ましく思へた。如何に價值論が數量測定の一単位之の缺乏から惱まされてゐるかを發いた時大なる力が以上の論證に附加つた。一物の價值は、ゼ・エス・ミルに依れば、その物の所有が一般の購買商品の上に與ふる支配である、と書かれてゐる。が、かゝる概念は算術的明瞭と確定とを要求する初步理論の基礎としては甚だ不適當である。所謂主觀的價值論が出現し價值はその基礎を人間の慾望の中に有つと擁護した時、より確定的な量概念の必要が最早や忽にする事が出來なかつた。效用は基礎的な量的概念として持込まれ效用の程度が數字や圖で示された。經濟理論の體系はさうした基礎の上に打立てられねばならなかつたけれども、異なる量の測定單位の必要

9) Cf. "Nature and Necessity." Ch. II. and Theoretische Sozialökonomie, Kap. VI.

10) Fundamental, 1925, pp. 71-82

11) "Fundamental," p. 47.

12) 13) *ibid.* d. 47

14) *ibid.* p. 49

に就ては一般に少しの注意も拂はれなかつた。近代高等數學では全數の初步系列の算術的根據が最本質的な事として考へられる。經濟學は單位を確立する事に注意を拂はないでは、經濟學が沈思しつゝある數量を測定する事は出来ない。此根本的な點に於ける如何なる曖昧も理論が到達する結果の説明をして甚だ不確實ならしむるだらう。例へば若し理論的研究が、效用の極大が或事情の下に達せらるゝ事を示すならば、此結果の意味は本質的に、效用が測定されなくてはならぬところの方法に依存する。價格概念は此點に關して價值概念よりも大に勝る。何となれば價格は貨幣單位で測られ、常に確定數に依つて表され得るから。此事實は全價格理論をして、經濟理論の全體系の初步的緒論として及終局的基礎として相應はしからしむ¹⁵⁾「同學派が限界效用を交換價值の眞實且終局の基礎であると宣言した時現實及論理との連絡を失つた。何となれば第一に消費の各部門に於ける限界效用が價格に等しいといふ事は全然正しくないから。即ち裕福な人に取つては

價格が極めて高い時にすら買入るゝ商品の分量は同一だとの事實によつて消費部門は一般に大多數である。然し第二に、之はもつと重要な事だが、限界效用と價格とが一致した時でさへ限界效用は價格の基礎として表示され能はぬ。何となれば價格を知る前にどれだけの商品が消費されるだらうかを、從つて何處に限界存するやを吾々は決して知らないからである。かくて限界效用概念の上に満足な價值論を打立てんとする主觀派の要求は斥けられねばならぬ¹⁶⁾」

「成程價值論は自己の仕事に熱心にやつたから討議には眞の算術的形式を與へ、かくて若干の測定單位例へば快苦或は效用の如きを導入れた。而も其事實によつて價值勘定の單位の意味に於て貨幣單位を要請した。それだからして價值論は本質的に價格論であつた¹⁷⁾」
「經濟學は最初から方法と手續とを對象の本質から引出さうとしないならば邪道へ引入れられ勝ちである。若し勝手に或概念を選んでその概念を採穿することを経済學の目的とするならば研究の十中八九は一方

15) ibid. pp. 49-51.

16) ibid. pp. 69-70.

17) ibid. p. 65.

的偏頗に悩むだらう：アダム・スミス及弟子達は國民の富の性質と諸原因の研究を好んでし、疑もなく研究對象の勝手な選擇に驅立てられて富に、而も其に依つて今吾々が一方的だとし誤解だとする所の判斷と陳情とに、不當な卓越を與へた。同様にして後の學派は勝手に價值概念を選擇し身を落着けて此概念を分析した。

：此事は經濟學が邪道に引きずられゆくを意味する。經濟學の本質的對象は經濟生活であるから、最初から此經濟生活の記述に努力を向けるならば最も正しい道しるべを有つであらう。そこで貨幣形態に於ける交換經濟を研究する事は極めて自然であらうし、貨幣單位の使用なき價值理論を先づ別個に打立てる事は人爲的であり迂遠なやり方である¹⁸⁾」

しからば何故にさうした迂遠なやり方が教育上必要だとして考へられて來たかの動機を、¹⁹⁾(一)經濟論の初めに當つては全複合的な貨幣論を持たむ事は避くべきだと考へた、だから經濟學の初歩的説明には貨幣なしとする事が義務だと考へ、²⁰⁾(二)財産の交換はあるが貨

幣のない原始社會が、凡ての交換の基礎として貨幣制度を有する近代社會に先行するとの觀念から、理論的説明に於ても此社會發展に従ふべしと考へられ、かゝる原始狀態の研究に依つて、若し直接に近代社會の貨幣經濟に注意を向けるならば吾々の分析から漏れるでもあらうところの經濟的骨子に徹するとが出來ると考へられたから、だとしてゐる。彼は之を反駁して曰く、

「交換經濟の研究を始める前に價值を算術的概念として議論すべき理由を有たぬ。交換經濟の研究を始めるや否や吾々の研究對象は當然に貨幣を有する。尠くとも價值が測定さるゝ貨幣單位を有する社會である。だから貨幣單位の要請は、吾々の結果の妥當性の如何なる勝手な制限からも免れ得る²¹⁾」「貨幣なき物々交換時代

より貨幣經濟への經濟生活發展の全概念は疑ひもなく本質的に間違つて居り、十八世紀に流行し甚だ多くのロマンティックな愛嬌の記述の原因となつたがしかし歴史的事實とは縁遠い所の the natural state of things の觀念と同一概念の列に並べらるべきである。公共生

18) ibid. pp. 51-53.

19) ibid. p. 53.

20) ibid. p. 54.

21) ibid. p. 55.

活理論に於てルソーの *contrat social* の觀念及それに先立つ社會の自然的狀態の觀念とを棄てた如く、經濟學に於ては經驗から知る所の貨幣經濟に先立つ物々交換經濟の觀念を棄つべきである。貨幣は規則的な商品交換に慣らされた社會に持込まれた新發明でもなければ、當社會に依つて熟慮しつゝ、受取られた新發明でもなく、却て吾々の貨幣制度は財貨交換制度と等しき歩調 *Pain Passu* にて發展して來たものである。……人類生活史に於ては、貨幣の使用なき財貨交換に正常的に依存する社會の存在しなかつたことは間違ない²²⁾」

「交換經濟を研究しようとするや否や、直ちに、凡ての價值を測定することの出来る貨幣單位を持込まねばならぬ。その時その價值は價格となるだらうし、最早や吾々は別個に價值概念を引入れる用がない。出鼻に價值論を以て惱み抜くことなしに價格論の組立てを進めることが出来る」²³⁾「成程、重要な疑問、即ち如何にして貨幣單位は確定するか？何が貨幣購買力を決定するか？何うして貨幣單位の安定性が保障されるか？

といった重要な疑問が残るか、此等の疑問は經濟學研究の最初に答へられ得ない。貨幣理論の説明に延ばさねばならぬ」²⁴⁾

以上、カッセルの價值論廢止の理由を述べた。內在的批判が残されてゐる。と共に價值論に關する、數理經濟學の限界に關する、學問論に關する多くの根本的な疑問が今筆者の頭を去來する。若し初學者らしい大膽なものの言ひぶりが許されるとしたならば、わたくしは、カッセルの價值論否定の否定をし度く思ふ。慥くともカッセルの價值觀に對する何がしかの修正を加へ度く思ふ。しかし與へられたる紙面の枠内に於て之を果すべくもない。加之此の小論は或る小さな企てのプレルードに過ぎない以上他の機會に譲るとして、茲では更に進んで、價值論を廢棄して價格論^{*}を以て終始するカッセルは、しからば價格問題を如何に取扱はんとするかに就て、暫時彼をして言ふところをして言はしめなくてはならない。

三 價格問題の取扱²⁵⁾

經濟理論の本質的機能は、如何にして價格が決定せらるゝかを明かにするにある。此問題の中には二つの別々の疑問が含まれてゐる、即ち如何にして價格は互に

22) pp. 56-57.
23) ibid. p. 61.
24) ibid. p. 62.

* 價格論そのものに就ては更めて問題にする日もあらう。
25) Cassel, Treatment of Price Problems, The Economic Journal, Vol. X XXVIII, Dec. 1928. による

相、對、的、に定められるかと云ふことと、如何にして價格計算の單位は定められるか、他の言葉を以てすれば如何にして價格の絶、對、的、高さが定められるかといふ事である。此等二つの疑問は別々に離して考へる事が良い。第一の疑問は一般經濟理論の對象であり、第二の疑問は貨幣問題であつて其解決は貨幣理論の本質的對象である。

價格決定の全問題は第一着に外界との關係の無い、closed communityの假定の上に論議されねばならぬ。それから最も單純な假定は一國が物價の一般的水準を一定に保つやうに規制されたる紙幣を有つ事である。凡ての實際價格問題は（物價の一般的水準の混亂が假設に依つて排除されたる）此假定の下で取扱はれねばならぬ。或價格の騰貴はかゝる事情の下では常に他の價格の下落に依つて權衡を保たねばならぬ。それで如何なる特殊價格問題の分析も二つの運動の方向が明かにされるまでは完全ではない。

此問題が monetary side を有しないとも限らぬ。其

時は此面の論議は物價の一般的水準を一定に保つ問題の、及該目的の爲に要求された實際政策の、上に與へられたる原因の效果を探索する形を取らねばならぬ。

若し貿易する二國を取扱はねばならぬならば、一新要素が價格決定問題の中に入込む。茲では最も單純な假定は二國各々の通貨が紙幣基礎の上に在りて而も物價の一般的水準が一定に留る事である。然る時は價格決定問題に於ける何れの新作因の效果も半ば二國各々に於ける相對的價格の混亂として、半ば二國間の爲替相場 rate of exchange の變化として研究する事も出来るよう。

理論上、二國に於ける經濟狀態の、或は二國間の貿易關係の、如何なる變化も爲替相場の變化を惹起するかもしれぬ。だから、理論上はかゝる變化の可能性が常に試験さるべきである。然し乍ら實際上はかゝる效果は極めて狭い限界内に閉込められるらしい。可なり大きな爲替相場の動きは通例只々何れか一方の國に於

ける、物價の一般的水準の變化の結果としての、可能である。若し之等水準が、吾々の假定に依りて、一定に保たれるならば、兩國間の爲替相場は一般に經濟的諸作因——これの效果はだからして主として二國に於ける相對的價格の混亂に閉込められねばならぬところの——の影響に敏感で無いと豫期してもいい。

此結論——Purchasing Power Parity Theory——取つて重要である——は往々論争されて來た、そして爲替相場の上の經濟的諸原因の效果は貨幣原因の效果即ち物價水準の變化の效果よりも甚だ大であるかもしれぬとさへ言はれて來た。此見解は一國の物價水準の變化は爲替相場を以前の十倍百倍或は更にもつとさへ騰貴せしむると云ふ事實に依つて覆される。然るに其に反して、若し兩國に於ける物價の一般的水準が一定に當るならば、經濟狀態の異常な動亂のみが爲替相場の動きを惹起することは有りさうな事である。かゝる動きは、若し二國が密接に而かも多方面な貿易關係に依つてお互に連絡するならば、一般に殆んど目に見えぬ程微細である。もつと重要な爲替相場の變動は、例外の場合即ち尠くとも一國の外國貿易が本質的に一商品乃至は甚だ少數商品に依據する時に起る。

關稅率に於ける甚だ重要な増加すら、物價の一般的

水準間の關係が無變化に留まつてゐる國家間の爲替相場の上に相當の效果を産出する事は不可能である。一國の稅率の如何なる變化の效果も、だから本質的には商品の相對的價格の上の效果に過ぎない。其結果關稅の増加は或商品價格の騰貴のみならず其れに相應して他種商品價格の下落にも效果を有たねばならぬこととなる。之等上下は、物價の一般的水準がそつくり其儘で居るやうにお互に平均を保たねばならぬ。若し或價格の低下の方向に於ける此效果に注意が拂はれないならば關稅率問題の研究は完全では無い。従つて關稅率に依つて惹起されると信ぜらるる物價騰貴に單純に基礎を置く所の“burden of the tariff”の通俗の計算は排斥されねばならぬ。

勿論、關稅率效果の深い研究に就ては、如何にして關稅率が爲替相場に影響を及ぼしたかの疑問が残る。然し乍ら概して此疑問の試験の結果は寧ろ否定的であると期待せねばならぬ。

若し通貨が金本位に基くならば、價格決定問題の取

扱は materially に變化せずして、technically に他の形を取る。金本位そのものの安定を確保する爲には一國は他の金本位國（世界の爾餘の國と想像してもよろしい）との爲替相場を一定に維持せねばならぬ。單純ならしむる爲に世界市場に於ける金の購買力が一定に留るものと、即ち world's gold piles の一般的水準が一定に留るものと、假定するならぬ、single gold-standard country に對する各價格決定問題は、此國の物價の一般的水準が不變化に維持せらるるとの假定の下に研究さるべきである。其時如何なる價格の騰貴もそれに照應する他の價格の下落に依つて必ず平均されねばならぬ。

或作因は世界市場に於ける金の購買力に影響を及ぼすかもしれぬ。だからかかる影響は特殊研究の對象でなくてはならぬ。然乍ら近代狀態の下に在りては世界市場に於ける金の購買力は自働的に economic forces の作用に依つて決定されない。金の購買力の上に甚だ強大なる統制力を獲得する事は主要諸國及諸國中央銀行

間の協力に對して可能であるといふ事が益々認知されつつある。うまくもくろまれた gold economising policy が續くものと假定すれば、金で言表された世界物價の一般的水準の變化の疑問は偏頗かもしれぬ。如何なる單金本位制國にとつても價格決定問題はだから實際上相對的價格決定の問題に歸する。經濟學者達が、價格決定問題の論議が technically に一樣な方針で續行されるやうに、價格決定問題の formal treatment に關して意志疏通して折合がつくことは甚だ好ましく思はれる。

價格決定過程に對する租税の影響を討議せねばならぬ。此取扱は、安定せる一般的水準の假定の下に於ける相對的價格への効果と、金本位の假定の下に於ける此水準そのものの効果とをハッキリ區別するを可とする。南アフリカの金生産者達は納税難に依つて商賣が妨けになるとの意見を有つて居る。若し此見解に従つて租税が年々の金生産を減少するならば世界の一般價格水準は影響を受けるかもしれぬ。しかし尠く

とも一時 gold-economising policy によつて緩和される。かくて金價格の一般的水準は南アフリカの租税の影響にはかかはり無く一定を保つ。他諸國、特に自ら金を生産しない國の租税は金の購買力に影響を有たぬと假定することが合理的かもしれぬ。かくて租税が價格に對する影響の問題は、當該國家内の相對的價格決定問題に歸着する。そして我々は *priceraising effects* は其に照應する *price-depressing effects* に依つて平均されねばなるぬといふ我々の一般的規則に立還る。其當然の決論として *average prices* に關する統計は租税の効果に就て何物をも吾々に語つて呉れ無いと期待せねばならぬ。問題の範圍は此に依つて限定されたが、價格に對する租税の影響の問題は尙十分の困難を留める。

—五〇・二四—

- 1) Yule: An Introduction to the Theory of Statistics p. 157
- 2) Mordecai Ezekiel: Meaning and Significance of Correlation Coefficients (The Amer. Eco. Review vol. XIX. No.2. Jun. 1929)